

青梅市文化財ニュース

第362号

平成29年12月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

害獣と呼ばれるものたちへの思い

現在、青梅市内に関わらず日本中の多くの民家、寺社がハクビシンやアライグマの被害を受けています。ある程度統計の取れている農業被害を除き、家庭菜園のような小さな農作物の被害、個々に依頼する駆除や建物の修繕、清掃費などを被害金額として総計すれば膨大な金額になるでしょう。

私の住む寺院の建物への被害としては、出入りするため天板をずらす、少しだけ開いていた穴をかじって広げるなど直接建物を傷つけること、配線の一部をかじるなどもありました。配線に関しては、直接火災の原因ともなるわけで早急な補修が必要となりました。土日になると人の出入りが多くなる寺院にとって、一番困ったことのひとつは、糞尿ということになります。

特にジャコウネコ科のハクビシンの尿は、独特の匂いがして大変臭いです。また、決まった場所に用を足すため、天井の一角や壁にシミができたり、夏場は床にウジが落ちているといったようなこともありました。

その際は、駆除業者や知り合いに頼んで駆除、清掃を行いました。駆除については空振りに終わりましたが、450程度のごみ袋5袋ほども糞が出たのを覚えています。

その後の予防としては樟脳しょうのうを天井裏に撒きました。効果はてきめんで、樟脳が気化して無くなるまでの間に動物の気配を感じるようなことは起こりませんでした。知り合いによれば、木酢液などを置くなどしても効果があるということです。しかしこれも一時のことで樟脳の効果がなくなると、また天井裏に動物の気配が戻ってきてしまいました。個人の対応としてはこまめに天井裏を点検し、人間の存在を教えることや樟脳を撒くといったような予防策しか講じられないのが現状ですね。

秋も深まる季節になると、夜の境内で、熟した柿を取り合うアライグマとハクビシンのケンカも目にしました。

ハクビシンは、大陸より持ち込まれ帰化した説や在来種説など起源に諸説あるようで、はっきりしないようですが、ペット用や食用として持ち込まれて投棄され、個体数を増やしていったアライグマのような外来種たちは、その起源が人間の手によるということは明らかです。

すぐ目の前に身近に生えている植物だけを取ってみても、昔から日本に群生していた植物の実も多く種類の起源は国外からきたものであると聞きました。町中に群生し、最近

ニュースでも目にしたナガミヒナゲシや、ここ数年境内でもよく見かけるようになったセイタカアワダチソウなどは特に目を引くものです。

平成 21 年ごろから青梅市内で猛威を振るうプラムポックスウィルスによる梅農家への被害、観光への被害は甚大なものとなっています。私達にとっては、何より長年慣れ親しんだ風景が変わってしまう、よりどころともいえる故郷の風景が一瞬で失われてゆく、今後このような事態は起こりえるのだということを考えさせられます。青梅でも限られた場所で梅の植樹が可能になってきている中、今年になって、感染が確認されたのか近隣の梅が伐採されたのを目にしました。

多くの人々が気軽に世界中を行き交う今、衣類や荷物に紛れて人の手によって国内に運ばれて来るこれらの外来種やウィルスを根絶するのは、完全にはできないということでしょうし、地球の自然は風や鳥や多くの自然現象によって循環していったものだ素人の私でもわかることではあります。また、日本の町や里の風景がそういった循環の中で生まれていたものだという理解もあります。

私も寺院の境内を管理する際、動植物を扱うことが多岐に渡ってあるわけですが、たとえ個人の小さな行動だったとしても、もしかしたら大きく自然を、風景を変えてしまう、人々の生活を変えてしまう可能性があるのだと考えさせられました。

農業の保全、文化財の保全などの人間の生活を守るということを考えると、むやみに人の都合で動植物を自然に放たないことはもちろん、それによって絶滅にひんしている動植物を守るために、駆除などによる徹底した管理が必要なものもあるでしょう。しかし、近年になって帰化しつつある動植物たちとうまく付き合っていく方法を考えていくことも必要なことかもしれませんね。

(文責 田中昌典)